

---

# さきふれ

芹沢 忍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さきぶれ

### 【Nコード】

N3394N

### 【作者名】

芹沢 忍

### 【あらすじ】

人とは違う感覚を持っていることに気づいてしまった主人公が、淡々とそのことについて語る話し。貴方ならどう思いますか？

甘い匂いが、ふと、漂うことがある。しかし、その匂いは酷く重苦しく濃厚で、どちらかと言えば不愉快な部類に入る。

雑踏ですれ違う人の中で。通勤中の電車やバスの中で。時間帯も曜日もバラバラである。特別な法則は無いようだ。年齢も子供から大人、老人まで多岐に渡る。

以前、喫茶店で余りにも気になり、同席していた友人に尋ねた事がある。甘い匂いが気にならないか、と。友人は不審そうな顔をしていた。何処にそんな匂いがあるのかと、その目が私に問うていた。どうやら自分が特別な感覚を有しているらしと、その時にうつすらと自覚したのだ。以来、余程親しい間柄の人間であっても、その事を口にした事は無い。

匂いの源が何であるのか知ったのは離別の席だった。モノトーンの服に身を包んだ参列者と共に、遠方に住まう祖父を火葬場で見送ることになった。幸運な事に、二十歳を過ぎて初めて体験する出来事であった。葬儀を終えると出棺した祖父の後を追ひ、火葬場へと向かった。

火葬場に、近づくに連れて、段々と、濃密な、気配が増す。葬儀中から、感じていた、あの、甘い匂いも、強くなる。

しかし、甘ったるい匂いはいつもとほは違い、他の人も感じているようだ。表情でそれが窺える。ひそめた眉は、匂いに対する不快感の現われであろう。

「ああ、この匂いだったのか」

祖父が荼毘に伏される際に確信した。開かれた火葬炉から、ドライアイスが気化するように、何かが地を這うように洩れ出している。リノリウムの床をのたくる気配に怖じけづき脚が自然に退く。形状しがたい圧迫感と恐怖は、いずれ訪れる死への本能的な畏怖だ。

焼場に纏わり付く独特な空気。重くのしかかるような圧迫感。呼

吸が苦しくなる程に感じる匂いと熱。それらは時折感じていた匂いに触れた際に得ている感覚を濃縮したものだ。

場に立ち込める匂いに悪酔いして吐き気がする。目眩を覚えて近くにあった壁にもたれた。頭の中に、蝉が一斉に鳴くように、わんわんと不協和音が木霊する。私は空気を求めるように、壁に背を預け、顔を翳しながら空を仰いだ。

参列者はそんな私を放って置いてくれた。いや、祖父の死に集中してしてくれたと言った方が正しいか。はたまた近親者の死を嘆く情の厚い人物と見て放って置いてくれたのかは判らない。兎に角、事実を認識したばかりで混乱する私にとっては有り難いことだった。骨を拾うまではまだ時間がかかる。待つ間の控室へ移るにつれて重圧が薄れた。楽になる事により、私も徐々に思考力を取り戻す事が出来る様になって来た。

人の最期の匂いと気配が、このようなものだとは思っても抛らなかつた。常々感じていた不快感や匂いに対する恐怖の噴出なのだろう。それらを私は死のさきぶれとして感じていたのだ。達したのはその様な結論だった。

あまり欲しくない贈答品を受け取ったものだと、一人自宅に戻ってから自嘲気味に笑い狂った。笑い過ぎて涙が零れる。これからは匂いに触れる都度、厭でも死を意識しないとイケない。その事が辛かった。普通に暮らすのには必要の無い、いや、あっても仕方が無いものだ。

知人に訪れる予兆を覚つても、その事は決して口外出来ない。近々自分が死ぬと言われたら、その言葉を発した人間に何を抱くか。況してや、傍で聞いた人間が、その末を見届けたらどうするのか。結末は判り切っている。割り切つて暮らす術を覚える事が必要だと強く思ったものだ。

時折感じる匂いは今でも変わる事は無い。だが、近頃、この周囲には、甘い匂いが満ちて来ている。匂いが増している気配に気付いて、私は長期休暇を申請した。数日後にはこの場所を離れるつもり

だ。私がこの地を発つのと、自身が甘く香り始めるのとは、どちらが先になるであろうか。生死を賭けた勝負に、私の胸は、今、緊張に震え続けているのである。

## （後書き）

他のサイトにも掲載している作品です。そこで「もう少し長くても良いかな」というご意見を頂きましたが、現状これが精一杯。暫くしたら見直して修正を入れるかもしれませんが。ホラーということにしましたが、どちらかというと心理劇かなあと思わなくもない作品です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3394n/>

---

さきぶれ

2010年10月9日13時01分発行